群馬県天然記念物　ヒメギフチョウ保全推進のお願い

本会は、1945 年(昭和 20 年)創立されたわが国最大の鱗翅目昆虫(蝶･蛾類)研究者の学会です。創立当初より鱗翅目昆虫を総合的に研究して参りましたが、『日本産蝶類の衰亡と保護･第 8 集』(2022 年)を刊行するなど、自然保護分野への社会的貢献にも務めております。最近では長崎県対馬市と共催して「ツシマウラボシシジミ（チョウ）保全シンポジウム」を開催するなど、地域における事業にも積極的に協力を行っております。

さて、本会会員も参加する「赤城姫を愛する集まり（”集まり”)」は、1987 年の発足当初よりボランティア的に、赤城山に生息する学術的に貴重なヒメギフチョウの調査およびその生息場所の保護･保全活動を行ってきました。その活動内容は毎年”集まり”の発行する『赤城姫』に克明に記録され、本会のセミナ-などでも報告されて、日本の多くの研究者や愛好者の知るところとなっています。伝統的な農業や森林管理が維持してきた、いわゆる「里山」に生活するチョウは、その荒廃や消失にともなって全国的に衰退傾向にありますが、ヒメギフチョウもその代表的な種のひとつです。近年はそれに加え、急速に増加する鹿による食害も深刻な状況になっています。赤城山のヒメギフチョウ集団は孤立しており、個体群の縮小は雌雄の出会い率を低下させ近親交配率を増加させるので、集団の崩壊に直結する深刻な問題です。そのため赤城山において、どのようにその危機を回避するかは本会会員をはじめ全国の関係者の注目するところとなっています。

“集まり”の調査によると 2023 年の総産卵数は急激に減少して 100 卵以下ということで、これはチョウの個体群は生態学でいう「絶滅限界密度」にまで減少しているということができます。“集まり”はチョウ類保全の基本方針として、生息場所の確保･改善（生息域内保全）が最も重要な問題であると主張してきましたが、今般の緊急事態にあたっては人工増殖による累代飼育（生息域外保全）も必要と判断します。近年のチョウ保全では極端に生息数の減少したチョウにおいては、ツシマウラボシシジミ（長崎県)、ヒョウモンモドキ（広島県）などのように生息域内保全と生息域外保全を並行して実施する必要があるといわれています。したがって“集まり”の提案する生息域外保全（累代飼育による増殖）と生息域内保全（防鹿柵の設置と食草の増殖・移植）のコンビネーションによる野外個体群の復活策は、現在取り得る最善の方法と思われます。

以上のように、本会は“集まり”の提案する赤城山ヒメギフチョウの保全方策を支持し、貴機関が“集まり”の提案する計画を群馬県内関連組織の協力のもとに早急に実行に移されることを要望するものです。本会はこの事業推進が学術的にも重要な資料

をもたらすものと信じています。最後に、かけがえのない赤城山のヒメギフチョウを次世代に引き継ぐことができますように、本件についての御高配を重ねてお願い申し上げます。

以　上

2023 年 7 月 6 日

日本鱗翅学会
会　長　渡邊　通人
〒113-0001　東京都文京区白山 1-13-7
アクア白山ビル 5F　勝美印刷株式会社内
日本鱗翅学会事務局
Tel: 03-3812-5201

日本鱗翅学会
自然保護委員長　矢後　勝也
〒113-0033　東京都文京区本郷 7-3-1
東京大学 総合研究博物館
Tel: 03-5841-8455
Email: myago@um.u-tokyo.ac.jp